
新しい時代の被服構成学並にデザイン学

神谷みゑ子

われわれの生活の要素である衣・食・住の三つの分野のうち、特に衣と住は、近年益々国際的社会性をおびるに従い、急激に変容している。

日本は過去において寒暖の差の大きい住居の中で、家庭生活を中心とした被服であったのが、現在では余り季節に大きく左右されない設備ある住居と代り、又女性の職業範囲が男性のそれと殆んど変らない迄に進出して参りました。

ために動きあり、社会性ある服装であると同時に世界の流行の主流にも敏感な服装へと発展してきました。一方時代の変遷とともに、又快適な人間生活を営むためにも職業は益々細部に亘って専門化している。

そして時代の大きな流れによって家庭生活、社会生活は個々に適した専門職にたづさわることによって益々合理化されつつある。

そうして巾広く開放された女性の職業は、自分のもの何一つ縫えなくとも生活出来る特技のある女性（これが現代社会では普通なのである）が年々社会に巣立って行くのである。ために被服産業は大小企業によって大量生産され、大量消費されるという時代を迎えるに至ったのであります。

こうした家庭生活、社会生活の変貌に対して大学の被服構成学が一にぎりの人々によって愛好されるオールハンドのオートクチュールのみ研究に終るが如きことあれば誠に由々しき問

題であると思う。

既製服大国アメリカは別として、手作りの魅力をもって自負しているフランス、イギリスに去る8月・9月に渡り23日間他の学事と兼ね、被服の消費者生活を見る機会を得たので下に掲げて見ました。

これは旅行記の中よりそれに関係するもののみ抜萃したものであります。

8月27日

……………エリザベス家へ一同集まってマリア夫人の手料理で昼食会が賑やかに始まった。談たまたま服装のことに及んだ。4・5年前より被服教育の一大転換を察知し悩んでいた私は、大ざっぱであるが、早速質問を浴びせた。

彼女達の話によると、彼女達の被服の85%まではプレタ・ポルテで間に合わせるのである。その中5%が家庭で作り、残り10%はオーダーするのだそうである。そのオーダーが最近はとくに高く1ヶ月分の給料が飛んでしまうので漸次プレタのみにするとのことである。（おおこれは日本も同じことである。10年前頃迄は、パリのオート・クチュールのみの研究に励んで他を顧みなかったスタイリスト（服飾関係専門に仕事をしている人）も人件費の上昇と生活テンポの急進で、特別の階級は別として、プレタを産して需要者に向ける外はないといっても過言ではなからう。）

被服の消費生活形態が文化人より先がけて変って行く現在、大学は社会的要請をふまえて学問的内容を変化させ、被服教育の一大転換をして、これが生産の先覚者を養成しなければならない。

8月31日

……………ケンブリッジの様々な思い出を後に
150年前からの古びた電車に乗って午後5時頃ロンドンのキングスクロスに着いた。

その附近は日本の古都京都を思わしむ感じである。歩いている人の服装も決してモダンというものはない。6年前ミニ全盛時代のロンドンはもっと清新さがあった様な気がする。早速ホテルへ荷物をあづけて外出した。

路行く人の服装は大きく三つに分けることが出来る。老年婦人は依然として昔ながらの帽子に花を付けて行儀よく手袋をはめているし（まことにフォーマルである）中年婦人は殆んど帽子はかむっていないが、スーツなりワンピースをキチンと着ているので、体格のいい英国人はシンプルなプレタでも大変立派に見えます。

若者は依然としてサベッジスタイル横行である。パリコレクションどこ吹く風、あくまでもマイペース、まことにファッションも多種多様、消費者が堂々と自信を以て業界を振廻している形であります。思へば14年前初めてロンドンの土を踏んだ時、リージェント通り、オックスフォード通りのウィンドウを片端からカメラを向けたものですが、今ではむしろ日本の方がリードしている形です。然しこれはあく迄マテリアルの製産を除外しての話で、マテリアルの中、特に染色の優秀さはその比でありません。同じマテリアルを使っただけのデザインを

いうのであります。

9月2日

……………余り暑いので夕方から外出することにした。9月のパリ、勿論コレクションにはシーズンオフである。然し最近のパリコレクションも空振りが多い。コレクションで発表し、ファッションブックで宣伝しても今の消費者はあくまで自主的である。

私はその消費者主義の服装が知りたかったのである。そんな意味で先づホテルに近いシャンゼリゼー通りに出た。喫茶店の前では歩道（約15米巾）の半分迄も椅子を出し道行く人を楽そうに眺めている。およそ発表された今秋のシルエットとは縁遠い様々なスタイル、様々な民族がエトワール広場に向って歩いている。眺めたり眺められたりで。（正に民族の行進であり、ミーティングである。）

かねがねパリは10数年も前から発表されたシルエットと消費者の服装とは程遠いものがあった。外貨獲得の国策だと仏人はいますが……。然しファッションの神様ともいわれたディオール1世が君臨している時は、シーズン毎のシルエットをご託宣なると世界の婦人達は勿論のこと、米国の映画会社まで撮影を中止して服を作り直したと聞く。あれから20年……。

今、このパリジェンヌ、在パリの各国民の服装を見る時、もうファッションの専制時代は終って、完全に消費者主義時代を迎えたとも云えよう。

そういえばパリのオートクチュールのデザイナー達の数も20数年前時代よりは半減以下とのこと。ファッションも時代の政治経済の影響を敏感に受けつつある。大衆の民意に迎合することのみ考える権威のない

又指導性のないデザイナーでもないけ
が、民意を無視するデザインはモードでも
ファッションにはならない。

9月4日

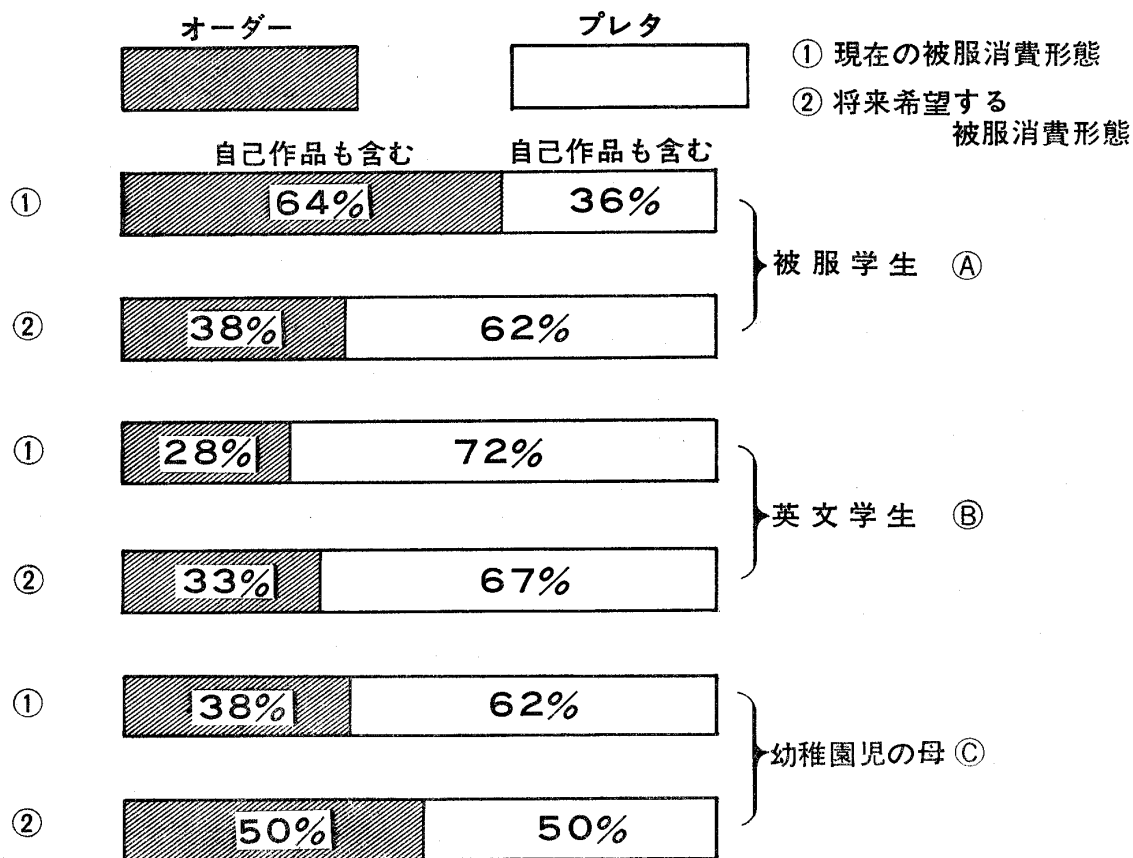
…………今年も流行の主流クラシックエレガ
ンスが発表されている。そんなことを考え
ながら昼食の素晴らしく美味しいフランス
料理で元気を付け、シックな店が並んでい
るリュウ・デュ・フォブル・サントノレ、
ロワイヤル通り等を訪れた。確かに色彩も
デザインの着想も抜群、何といってもマテ
リアルの色彩のよさは感嘆の外ない。パリ
の作品のよさは、優雅さにある。同じ染料
を使っても季候や水等のため日本ではこの
色が出ないと聞いている。然し同じマテリ
アルを使うならば現在の日本人の感覚の方

がすぐれているかとも思う。

西洋料理でも中国料理でも日本人の作っ
たものは、本場を凌ぐ美味しさである。味
覚にすぐれている者は美覚もすぐれている
と思う。毎年日本とECとは貿易が不均衡
である為、如何にしてECは日本へ商品を
売り付けようかと虎視眈眈の折柄ではある
が……。

欧州のどこか一角にマテリアルの工場で
も作り、後顧の憂のない青年がすぐれた知
性と技術と度胸でデザインと加工に挺身し
たならば欧州各地で日本製品が風靡するこ
とも可能であろう。

次に被服専攻、英文学科の学生各々50名、幼
稚園児を持つ若い母親50名について最近の被服
消費の実態を調べて見ました。



現在このことに実際関心を持っている④の考えと⑤、⑥の考えが反対になって面白い結果が出ているが……。このようにイギリス、フランスの被服の消費形態を見ても我国の実状もほぼ同じように、安価で手早く着られるものへと邁進している。

去る日、プレタのメーカーとしてトップクラスの営業部長、企画研究員との座談会によっても「プレタの産業は将来内外共に益々有望視されているが其の浮沈は一に企画研究員の双肩にある」とのこと。

このように新しい時代の変遷に対応出来る専門家を養成するには単なる家庭的な研究のみで、然も盛沢山のカリキュラムで、通り一遍であってはならない。時にはその研究がやや一方的になる嫌はあっても、この際一大転換をはかなければならないと思う。

それにはどうしても重点主義の教育並に研究が大切だと思う。勿論この方法が一般的に考えれば決して至上の方法だとは思わない。が、然しいやしくも今迄の被服専攻コースに於ては、どの学科もいわば通って来たという昔の花嫁修業的なものに止り、時代の変遷に順応出来る深い研究がなければ合理的で豊かな暮らしが出来ないと思う。まして二次繊維メーカーの渴望している企画研究員と（これは被服専攻学生に期待している）なると一層その感を深くする。こうした意味において、被服構成学、デザイン学並にファッション・ドローイングの単位を重点的に多くとるようにしてみっちり反復錬成する必要がある。

勿論法的に定められた他学科のことは言を俟たないが……。又被服構成の方もオールハンドのオートクチュール式なものは30%にとどめ残り70%の構成指導はオールマシンでプレタ式構成をすすめたい。

特に接着芯は年々各メーカーによって新しいものが開発されているので、各メーカーと緊密な連絡を取って接着効果を教室に展示発表した

りして、あらゆる角度より産学互に研究の場をつくり、オートクチュールとプレタの構成工程が異っていても、出来上りはまったく同じものを作る研究をしなければならないと思う。又、企業が学生に一番強く要望しているのは、すぐれたデザイン能力と模範的な裁断能力である。

そうしてよきデザインと模範的パターンによって広く下請縫製会社へ指令されるからである。そこで一番問題の大きいのはデザイン学である。限られた単位のなかでよりよい成果をあげようと思うと（特に短大の場合）どうしても、休暇、放課後を利用して、出来るだけ視たり聴いたりする機会を多くあたえたい。例えば音楽会、美術展、ファッションショウ、ウィンドウショッピングというように聴覚視覚によって、美しいものにあこがれる感動性を強くゆさぶることが大切である。

然し先天的に好んで視たり聴いたりする学生は少ないので、眠っている感受性を目覚めさせるには、思い切ってこうしたことを課題する必要がある、又課題したら必ずレポートを提出させることによって一層真剣に取り組む意欲が出てくるのである。

こうして正規の時間外でも、思いきり目を肥やすことが一番必要であると同時に片や正規のクラスではデザイン学の理論を進行させ、その創造意欲を何回も根気よく表現させることが大切である。

唯ここで一考を要することは、ここ1・2年前より「構造的デザイン（シルエット）はパリの発表を追従し、装飾的デザインは創造である」の鉄則が破られたことである。

消費者主義時代を迎えた現在、決してパリのシルエットのみ強要したり、勝手な自己陶醉のみの創造であったりしてはならない。大衆の食欲、レジャー、感情がわかる巾広い庶民性を持ち、人間工学的機能を研究すると同時に大衆より遙かに強い感受性と格調高い創造力を持って、大衆に愛されるデザインが創れるような人材を養成したいものである。